

世界遺産登録を契機に生まれた 新しい宗教文化

春日大社における春日山鍊成会の活動から

New Religious Culture Born by Registration as World Heritage :
From the Activity of Kasugayama Renseikai in Kasuga Taisha Shrine

川合泰代

KAWAI Yasuyo

はじめに

①世界遺産登録に対する春日大社の反応

②春日山鍊成会の歴史

③春日山鍊成会に集まる人々

おわりに

【論文要旨】

本稿は、世界遺産に登録されたことを契機に、古くからある日本有数の神社の一つである春日大社の内部から、春日大社にとって新しい宗教文化が生まれ、根付いていった過程を明らかにしたのである。

春日大社では、世界遺産に登録されたことをきっかけに、歴史的に長らく春日信仰における重要な聖地でありつづけ、一般人の入山が禁じられ続けてきた春日山に、神社の神職が案内しながら、一般人が登拝する活動がスタートした。これが春日山鍊成会の原型である。この活動は2009年で10周年を迎えた。

登拝ルートや登拝形式は、史実をもとに、現在の春日大社の神職により構成された。

春日山鍊成会の参加者は、今まで春日信仰と縁が深かった血縁や地縁による社会集団に属す人々ではなく、今まで春日大社と縁がなかった人々に多い。そしてそのほとんどが、個人的な関心事から個人単位で参加する。

現在の春日山鍊成会の状況をみると、リピーターになる人々が多くみられ、28回という参加回数を持つ人もいる。その要因の一つとして、参加者の聖なるものを希求する気持ちを満たすものが、春日山鍊成会にあるからだと推測される。

春日山鍊成会が行う、聖地春日山を登拝する活動は、世界遺産の理念とも共通するものがあつた。そして、春日大社に今まで縁のなかった人々のうち、聖なるものを希求する人々に受容され、今後も続いていくと予想される。

【キーワード】世界遺産、春日大社、新しい宗教文化、春日山鍊成会、聖地

はじめに

世界遺産とは、人類共通の宝という理念の下に、1972年のユネスコによる世界遺産条約成立以降、世界中の様々な場所が認定されつづけている記号である。国や宗教や民族等々の違いに関わらず、世界中の人々がその場所に、人類共通の宝としての価値を共有することを促される文化は、世界のグローバル化や均一化という現代的社会の潮流に沿って生まれた文化といえよう。

世界遺産に登録されることが、その場所に与える影響力はとても強い。ローカルな場所が、世界遺産に登録されたことを契機に、グローバルな世界へと投げ出されることになる。その結果、世界中から注目され、数多くの観光客を呼び込み、その変化に伴い、その場所における経済活動が盛んとなるとともに、そこに暮らしてきた人々の生活スタイルや価値観が、変化を促されることとなる。

世界遺産に登録されたことによる場所の変化は、世界遺産登録前に、国内や世界的スケールでは、ほぼ無名に近かった場所であるほど、強く生じるようである。日本国内での動きをみた場合、白川郷や屋久島における、世界遺産登録後の場所の変化は著しく、経済的効果とともに、相当の地域社会の変容を促すことになったようである⁽¹⁾。海外では、たとえば中国の麗江では、山村によると、世界遺産登録をきっかけに観光客が増加し、地域に根付いていた少数民族が他所へ移動し、空いた場所に観光客を相手にする外部の人々が流入し、彼らが世界遺産登録されたその場所で経済的効果を得る傾向があるという。世界遺産登録はときに、その場所の景観を固定化させ、そして景観を支えてきた地域社会を空洞化させ、結果的にその場所をテーマパーク化させてしまう危険性をもはらんでいるといえる。

しかしながら、世界遺産登録以前から国内や世界的スケールで有名な場所においては、世界遺産登録がもたらす力は、登録以前は無名であった場所とは異なるものがある。本稿で扱う春日大社がある奈良は、世界遺産登録以前から国内外の観光客を数多く取り込んできた場所であり、そういった人々を収容する土産物店舗や宿泊施設、観光ガイドの制度等々は、世界遺産登録以前からすでに充実していた。

本稿では、奈良に古くからある神社であり、世界遺産登録以前から国内外の観光客や信者を数多く受け入れてきた春日大社において、世界遺産登録という力が働いた時、何が生じ、そしてどのような変化が生れたのかを、聞き取りや参与観察に基づく調査⁽³⁾に基づき、明らかにした。

①……………世界遺産登録に対する春日大社の反応

春日大社は、平成10(1998)年12月2日、「古都奈良の文化財」の一つとして、世界文化遺産に登録された。登録された場所は、春日大社、春日山原始林、東大寺、興福寺、元興寺、薬師寺、唐招提寺、平城京跡である。

春日大社側は、世界遺産登録前から、すでに国内を代表する観光地の一つであるとともに、日本国を代表する神社の一つであるという自負があり、そのような活動を展開していた⁽⁴⁾。

しかしながら、春日大社が世界遺産に登録されることになったことから、春日大社の内部では、

これを機会に何か新しいことをしてみようという気運がおこることとなった。そして、春日大社の内部の人々に対して、新しい行事や、記念イベントを提案するように促し、それを公募として募集することになった。このときに出された企画の一つが、本稿で取り上げる春日山鍊成会かすがやまれんせいかいの活動である。

この企画を提出したのは、春日大社の神職でこんねぎ権禰宜の A 氏である。A 氏は、幼いころから山歩きが趣味で、出身地である群馬県の山々をよく歩いていた。そして、大学を卒業して春日大社に勤務するようになって以降も、大峰山や出羽三山などの修験道の山々の登拝活動に、積極的に参加していた。そして、春日山にも、時間をみつけては一人で登拝していた。

この A 氏が提出した企画は、一般の人々から参加者を募集して、春日山の登拝を行うものであった。

春日山とは、春日大社の社の背後に広がる山々である。この山は、ご神体として、春日信仰の中で歴史的に長く神聖視されつづけてきた山であり、いわば聖地である。そして、一般人の入山は、固く禁じられつづけてきた場所である。入山は、神職などの宗教的職業の者(5)に限られ続けてきた。中でも、春日大社のすぐ背後にある円錐形の山である御蓋山みかさやまは、春日信仰の中心的場所であり、春日大社の本宮神社がある。この本宮神社のある場所付近に、春日大社の本殿に祀られる鹿島・香取の神々が天下られたと信じられている。春日山とは、この御蓋山を含んだ総称として使う場合と、御蓋山と春日山を区別して使う場合がある。世界遺産に登録された春日山原始林とは、御蓋山を含んだ春日山の総称としての春日山である(6)。なお、春日山は、奈良の人々の水源地にも当たる場所であり、中・近世においては、奈良の町人や村人の雨乞いの対象の山でもあった。

さきの A 氏の提案は、春日大社に勤務する人々の会議において、意見が分かれることとなった。賛成意見としては、A 氏の先輩にあたる方の意見があった。この方は、出羽三山神社の神職の出身で、勉強のためにしばらく春日大社に在籍していた方であった。出羽三山は一般人による神式の登拝活動がすでに行われていたことから、この方としては一般人が春日山に登拝するという行為に抵抗はなかったと考えられる。一方、反対意見としては、歴史研究家でもある神職の方の意見があった。この方は、春日山の歴史の変遷を熟知しているがゆえに、歴史的に初めてとなる一般人の登拝活動に難色を示したと考えられる。その方の危惧は、登拝はきわめて神聖な行為であり、一般人の登拝はその神聖さを汚すのではないか、というものであった。

会議の結果、条件付きで、一般人の春日山登拝が認められることとなった。それは、登拝は神聖な行為であることから、一般人といえども、観光客ではなく、あくまで信仰心を持った人々による登拝であること、であった。

②……………春日山鍊成会の歴史

(1) 第一回の春日山登拝の会

企画を提案した A 氏により、春日山登拝の活動のガイドラインが作られていった。

まず、登拝希望者の募集方法である。募集は、春日大社でご祈祷等をした方や、古くから縁のあ

る方々にのみ配られている社報『春日』でのみ、募集することになった。そして、参加費用は、昼食代やご祈祷代等の諸経費を含み、1万円とした。この、募集方法と金額により、A氏は、観光気分や軽い気持ちの登山希望者を、ある程度、募集段階で排除することができると考えた。

次に、登拝のルートである。世界遺産に春日山原始林が登録されたことを契機に行う会であることから、春日山の奥山に古くからある五社を中心に、いくつかの社をめぐりながら春日山原始林を歩くルートが設定された。五社とは、高山神社、鳴神神社、神野神社、上水谷神社、大神神社の五つである。それぞれの社では、村人や町人による願いを受けて、宗教的職業の者により、雨乞いなどの儀式が長く行われてきた歴史がある。これらの神社のある場所は、それぞれ春日山の水源地や分水嶺などにあたる。設定されたルートは、今でも年に1度、春日大社の神職たちにより登拝と儀礼が行われるときに使われるルートと同じものであり、神職によるこの登拝儀礼の歴史は古い。

次に、登拝者の衣装である。これは、出羽三山神社で行われている形式を参考⁽⁷⁾にした。登拝者には、白系の服を着てきてもらい、当日は上着のみ白衣を貸し出し、それを着用して登拝してもらうこととなった。

登拝中の活動としては、訪れた社ごとに毎回、全員で中^{なかとみのはらえ}臣^{おおほらえ(8)}祓である大祓詞を奏上することとなった。

そして、登拝者の神聖性を確保するために、登拝者の前日の肉食を禁じることとなった。

はじめての、一般人参加による春日山の登拝の会は、平成11(1999)年3月20日に行われた。これは、春日大社が世界遺産に登録されて3ヶ月後のことであった。このときの会の活動名は「春日大社世界遺産登録記念行事 春日山奥山五社めぐり」であり、現在使用している春日山錬成会という会の名称はまだない。このときの主なコースは、貴賓館という春日大社本殿近くの集合場所に集合した後、春日大社の本殿(大宮神社)に参拝し、そののち若宮神社、紀伊神社を經由したのち、能登川沿いにある東海道自然歩道を通り、高山神社を拝し、そののち途中から人が普段は全く通らない春日山の山道に入り、鳴神神社、神野神社、上水谷神社、大神神社を拝し、その後、春日山遊歩道に入り若草山山頂に抜け、そこから若草山を下山し、春日大社の本殿近くに帰り、ご祈祷と直会を行う予定であった(図1参照)。

初回の参加者は、一般人が十数名、春日大社の神職が数名であった。筆者も参加した。

はじめに貴賓館にて、権宮司より一般登拝者に対して、登拝の心構えのレクチャーがあった。まず、春日大社とともに春日山原始林が世界文化遺産として登録されたことが紹介された後、春日山が自然遺産ではなく文化遺産として世界遺産に認定されたことは、春日山が春日大社の信仰文化を表すものとして世界的に意義付けられたということであり、春日山は大変神聖な山であるという認識が提示された後、そのことを踏まえて、登拝者は心して登ってほしいという、登拝者へのお願いが語られた。

貴賓館を出発後、ご本殿や若宮神社を經由して、当初の予定通りに進んでいったが、春にも関わらず途中で雪が降りはじめたことから、当初予定していた鳴神神社からはじまる山道への進行を避け、奈良奥山ドライブウェイの道を通り、若草山山頂で記念撮影をし(図2参照)、下山した。

下山してご祈祷が済んだ後、貴賓館にて一般登拝者は神職たちとともに、夕食を兼ねた直会に参加した。ここで一般登拝者は、自分がどのような気持ちで登拝の会に参加したのか、そして、参加

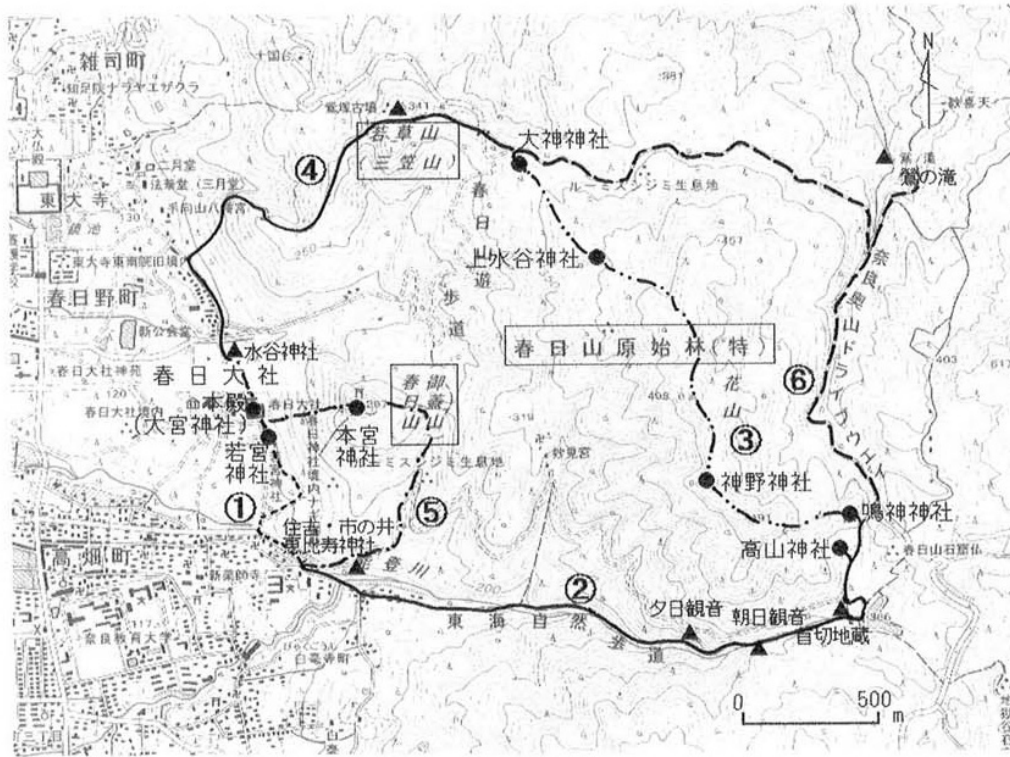


図1 春日山登拝の会(春日山錬成会)の登拝ルート

- ①→②→③→④：初回から2年目までのルート
 - ⑤→②→⑥→④：3年目から現在までの春・秋の峰のルート
 - ⑤→②→③→④：3年目から現在までの夏・冬の峰のルート
- 国土地理院発行 25000分の1の地形図「奈良」に加筆

後、どのようなことを感じたのか、などについて、発表することとなった。

この第一回の登拝の会は、一般人による春日山登拝の活動を、継続して行うか否かの判断の場でもあった。この第一回の登拝活動に参加した神職達は、一般人の登拝者の中に観光気分の人ほとんどおらず、したがって神聖さを保ったまま春日山の登拝ができた判断した。この審査の結果、一般人による春日山の登拝の活動は、継続が許可されることとなった。



図2 第1回の春日山登拝の会の記念撮影写真(若草山山頂にて)

その後は、企画したA氏を中心に2～3人の神職たちにより、この登拝の会の活動は、継続されていった。そして次第に登拝の会は、年に4回行われることで定着していった。それぞれ、春の峰は3月ごろ、夏の峰は6月ごろ、秋の峰は9月ごろ、冬の峰は11月ごろである。

その後の参加者の募集は主に、社報による広報と、参加経験者へのご案内の手紙と、クチコミによる情報伝達のみで行なわれた。そして、毎回参加者は集まりつづけた。

(2) 春日山鍊成会による御蓋山山頂の本宮神社への登拝

平成13(2001)年2月18日の春の峰から、春日山登拝のコースに、春日山で最も神聖視されている御蓋山山頂の本宮神社への登拝が加えられた。

一般人による本宮神社参拝に関しては、春日大社の内部において再び、賛否両論がおきた。しかしながら、過去2年間の活動実績と、その登拝者が観光目的ではなく、信仰心をもっている人々の集まりと神職側からみて判断できる人々の集まりでありつづけたことから、この件も春日大社の内部で了承された。

このときに、社報の掲載や過去の登拝経験者に配られた春日山登拝の募集案内の見出しは、「春日山鍊成会 春の峰・夏の峰開催要項」であった。活動が始まって3年目のころには、すでにこの活動が世界遺産登録を記念するものであるという意識は薄れており、会の活動は春日山鍊成会という会の名称で、春日大社の行事の一つとして定着しつつあった。なおこの頃には、世界遺産登録を記念して行われた、春日山鍊成会以外の数々の春日大社におけるイベントは、すでに終了していた。

このときは、次のようなコースであった。まずはじめに貴賓館に集合したのち、水谷神社でお祓いを行う。この後、春日大社の本殿、若宮神社を拝し、本殿と若宮神社の間にある本宮神社への入り口の鳥居をくぐり⁽⁹⁾、御蓋山に登拝し、山頂の本宮神社を拝する。その後、御蓋山を下り、山の裏手を抜けて、住吉・市ノ井恵比寿神社を拝し、そこから能登川沿いの東海道自然歩道に行く。途中、夕日観音や朝日観音を眺めながら、首切地蔵前で昼食となる。その後、高山神社を拝した後、普段は人が通らない春日山の山道に入り、鳴神社、神野神社、上水谷神社、大神神社を拝し、その後春日山遊歩道に入り、下山し、ご祈祷、直会を行うコースであった。

筆者も参加したこの会は、筆者を含めて、リピーターが多かった。そして、春日山鍊成会が人々の間で、一度だけではないものとして受容されはじめている兆しを感じるものであった。

この会の後、春日山鍊成会の登拝コースとしては、まずはじめに本宮神社に登拝することが定着した。そして、本宮神社登拝後のルートとして、次の二つのルートが季節ごとに使い分けられるようになった(図1参照)。双方とも、出発から首切地蔵での昼食までは同じルートである。その後一つは、春日奥山五社のうちの二つ、高山神社と鳴神社の2社を参拝した後、車道である奈良奥山ドライブウェイを歩き、鶯の滝を見た後、若草山山頂に登り、下山するルートである。これは、車道をルートとして取り入れることにより、山で事故等が発生した場合に、救援に迎えるルートである。初参加者は、このルートからの参加を薦められる。これは、春の峰、秋の峰で用いるルートである。もう一つは、首切地蔵から普段は人が入らない春日山の山道に入り、春日奥山五社すべてをめぐり、その後若草山山頂に登り、下山するルートである。この場合、山中での救援はほぼ不可能のため、初心者ではなく、2回目以降の参加者向きとなっている。これは、夏の峰、冬の峰で用いるルートである。なお、若草山へは、時間や天候等に応じて、登らないこともある。

(3) 春日山鍊成会のその後の主な変化

春日山鍊成会の基本的な部分は、前述の時期から現在までほぼ同じである。しかしながら、春日山鍊成会の活動に後から加わった活動もいくつかあることから、ここで述べておく。

平成 18 (2006) 年春の峰から、春日大社の境内の中にある施設に、希望者は前泊することが可能となった。この活動を、^{さんろう}参籠と称することとした。参籠は、この後継続していく。

これは、春日山鍊成会への参加者が、次章で述べるように、関東や四国など、遠方からの方が多く、それらの人々の多くが奈良市内のホテル等に前泊していたことを考慮してのことであった。

参籠者は、春日山鍊成会前日の夕方までに春日大社に集合する。そして、春日大社で毎日行われている、夕方の御日供祭などの祭礼に参加しながら、境内で精進料理である夕食をとり、そして宿泊する。翌朝は、朝の御日供祭などの祭礼に参加しながら、朝食をとり、そして、当日参加の人々と合流し、登拝する。

平成 20 (2008) 年 1 月 9 日から、春日山鍊成会の参加者を対象に、御蓋山山頂の本宮神社のみに登拝し、そこで大祓詞を何度も奏上するという活動がスタートした。これを春日大社では、「嘉例の本宮登拝」を 130 年ぶりに復興するものと位置づけた。

1 月 9 日は、鹿島・香取の神々が常陸国から御蓋山に天降られた日として、幕末までは本宮神社前で神職により百座・二百座の大祓詞の奏上を行っていたという史実がある。この史実に基づき、春日山鍊成会の方々に希望する人々を集めて、山頂本宮神社前に大祓詞を読み続ける儀式を行うこととなった。春日山鍊成会の参加者には、平成 19 (2007) 年 12 月に案内状が送付され、祭礼は年明けすぐの平日に行われた。予想に反して、春日山鍊成会の参加者の中から 43 人が参加し、祭礼が執り行われた。⁽¹⁰⁾

③……………春日山鍊成会に集まる人々

(1) 春日山鍊成会の参加者の人数とリピーターの割合

春日山鍊成会への参加は、すべて、参加者個人の自主的な参加が基本となっている。1 度だけの参加なのか、2 度、3 度と参加するリピーターになっていくのかは、すべて個人の判断に任されている。春日山鍊成会からは、一度参加すると、開催の案内状は届けられるものの、それ以上の勧誘は全くない。

リピーターとして参加し続けることにした人々にとっても、年に 4 回ある春日山鍊成会への参加ペースは、個人に任されている。毎回の参加でもかまわないし、1 年に 1 度、2 年に 1 度のペースでもかまわない。参加を希望する人々が、参加を断られることはほとんどないが、春日山鍊成会から参加を要請されることもほとんどない。

つまり春日山鍊成会は、自らの関心に基づいて参加する個人個人の人々が、ゆるやかにまとまって登拝する集団であるともいえよう。

以下、近年の参加者の名簿⁽¹¹⁾に基づき、その参加者の動向をみるとともに、名簿に基づき作成した表を適宜用いることとする。

図 3 は、平成 16 (2004) 年から平成 19 年 (2007) 年にかけての、春日山鍊成会への参加者の人数の推移である。

毎回、おおよそ 50 人から 70 人ほどの参加者がいる。初心者に薦められる春の峰、秋の峰は、初

図3 春日山錬成会への参加人数の推移

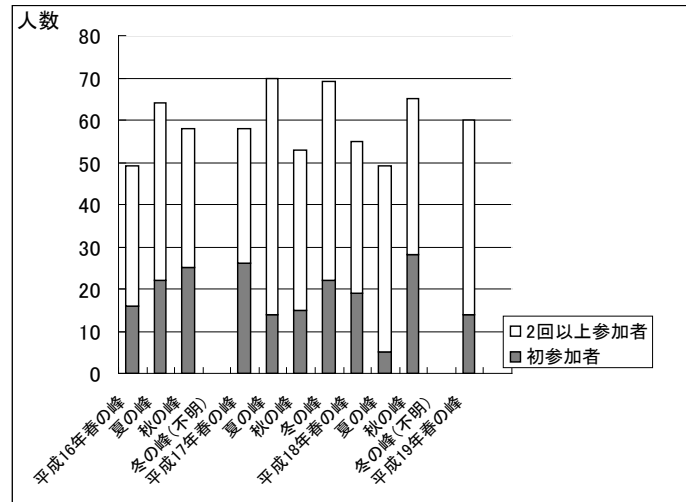
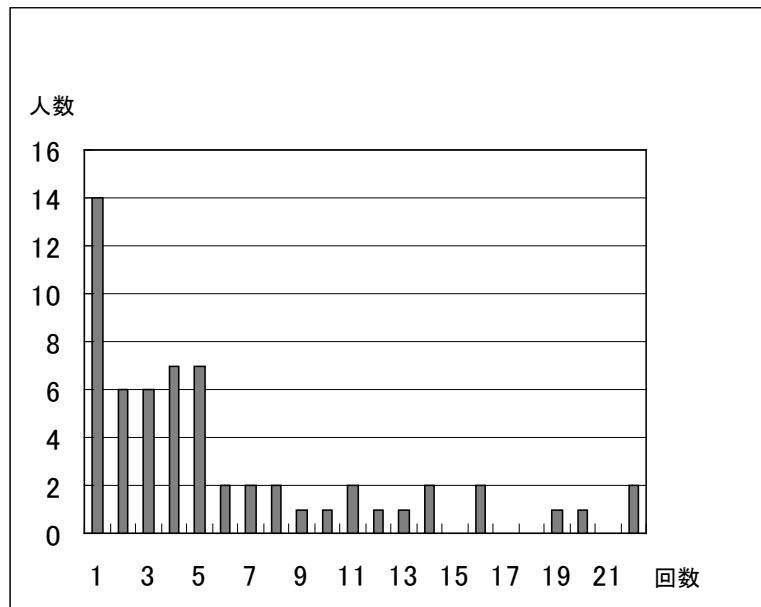


図4 平成19(2007)年春日山錬成会の春の峰における、参加者の登拝回数



心者が多いものの、半数以上は2回以上参加するリピーターである。春日奥山五社をめぐる夏の峰、冬の峰では、全体におけるリピーターの割合はさらに高くなる。

図4は、平成19(2007)年春の峰への参加者が、何回目の春日山錬成会への参加なのかを表したものである。初めての参加者が最も多いものの、2回目から5回目までの参加者がそれぞれ6人以上、それよりも回数の多い参加者も、それぞれに1人から2人程度見られる回が多く、最も多いところでは、22回目の参加者が2人いた。

図4から、春日山錬成会へ参加する人々の特徴としては、一度の参加で終える人もいるものの、多くの参加者が、何度も参加する傾向があることがわかる。

次に、参加者のうち、最も回数の多い人の参加回数の変化をみたい。平成16(2004)年春の峰では、最高参加者の参加回数は12回であった。ここから数えて18回目の春日山鍊成会である平成20(2008)年の秋の峰における、最高参加者の参加回数は、28回であった。このことから、この4年強の間、2回の休みがあるものの、ほぼ毎回参加している人がいることがわかる。

平成20(2008)年の秋の峰の参加者の参加回数をみると、最高回数の参加者の28回の方につづき、25回、22回、20回、19回、17回、16回、15回と、続々と回数を重ねている人がつづいていることがわかる。このことから、春日山鍊成会に参加した人々のうち、リピーターとして、毎回のように春日山鍊成会に参加しつづける人々が、出現しつづけていることが推測される。

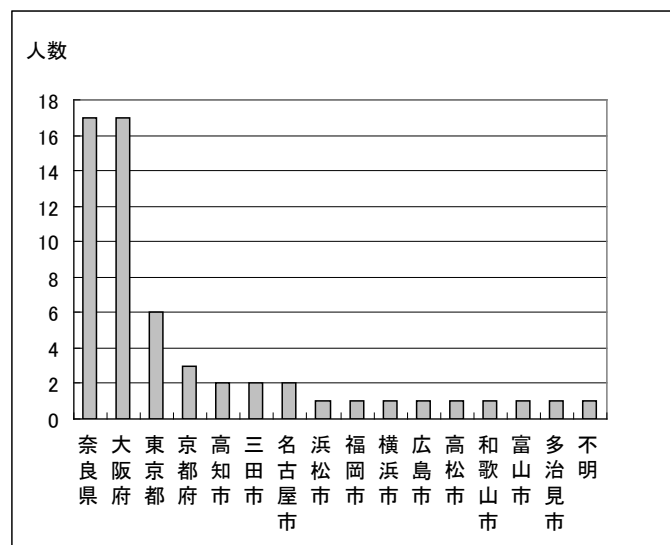
なお、春日山鍊成会では、参加者が登拝の回数を上げていきたくなるような仕組み⁽¹²⁾が存在する。たとえば、春日山鍊成会への参加者には、毎回冊子が配られるが、その中にその日の参加者の名前と、参加者の参加回数が記されている。参加者は、自分が何度目の参加なのか一目瞭然でわかるようになっている。また参加者には、登拝の手助けとなる、その人専用の棒杖が与えられ、これは春日大社側で保管し続けていく。これは、初回の人にはまっさらの状態であり、登拝毎に、印が押されることになる。したがって、登拝の回数が多い人ほど、その人の棒杖の印がたくさんあることになる。さらに近年では、登拝回数が20回を越えると、登拝のときに装着することを促される記念品が贈与されており、参加者たちは、20回以上の参加者が一目でわかるしくみになっている。

(2) 春日山鍊成会に参加する人々の居住地

図5は、平成19(2007)年春の峰の、参加者の居住地を図にしたものである⁽¹³⁾。図5から、春日山鍊成会への参加者は、全国に点在することがわかる。春日大社と距離的に近い奈良県や大阪府に居住する人々が最も多いものの、東京や横浜など首都圏からの参加者も多くみられる。また、中国・四国、北陸、中部、九州など、遠方からの参加者も、それぞれ数は多くはないものの存在する。

次に、この平成19(2007)年春の峰参加者のうち、春日山鍊成会前夜に春日大社に宿泊する活

図5 平成19(2007)年春日山鍊成会の春の峰における参加者の居住地



動である参籠に参加した人々の居住地をみってみる。すると、東京都が5人と最も多く、大阪府、高知市の人がそれぞれ2人ずつ、そして高松市、浜松市、三田市、福岡市、横浜市、広島市、和歌山市の方々が、それぞれ1人ずつであった。遠隔地の人々が、全員参籠に参加しているわけではないものの、遠隔地に居住する多くの人々に参籠の制度が利用されていることがわかった。

(3) 春日山鍊成会に参加する人々の社会的属性

春日大社を歴史的に信仰してきた人々は、藤原氏の家系の人々とともに、奈良に古くから住む町人や村人など、血縁や地縁をもとに作られた社会的集団に属す人々が多かった。しかしながら、春日山鍊成会への参加者にそういった類の人々は、ほとんどいない。

A氏によると、春日山鍊成会への参加は、圧倒的に一人が多い。家族や友達と連れ立って参加する人は稀である。一方で、春日山鍊成会へ参加を続けるうちに、友人になった人々と、この会の場で親交を深める例はみられるという。年齢としては、20歳前後の若い人の参加はほとんどみられず、40歳代くらいの参加者が最も多い。そして、男性だけでなく、女性の参加者が多い。

参加者の社会的属性としては、サラリーマンやOL、主婦など、一般的な職業に従事する人々が多い。その他の職業としては、気功師や整体師、マクロビオティックのような健康食品販売業などがみられ、ごく稀に、弟子をつれた霊能者といった類の人々の参加もみられる。

なお、ウォーキングや山登りへの関心からの参加者は、初回の参加で終わり、リピーターとしては定着しない傾向がみられる。

(4) 春日山鍊成会に参加する人々の気持ち

筆者は、平成19(2007)年3月18日に行われた春の峰に、前日の参籠と、当日の登拝の両方に参加し、参加者の一部の方々に聞き取りを行った(図6参照)。ここでは、そのときに筆者が得た情報をもとに、春日山鍊成会に参加する人々の気持ちを述べる。なお、ほとんどの方が筆者にとっては初対面であったことから、参加者の方々が語ってくれた気持ちのうち、本音を語らなかった方も多くおられたと思われる。ここで文字化したものが、参加者の気持ちのすべてではないことは付け加えておく。

春日山鍊成会への参加のきっかけは、様々であった。たとえば、もともと伊勢神宮や皇室に関心



図6 平成19(2007)年の春日山鍊成会の春の峰の記念撮影写真(若草山山頂にて)

があり、その流れでこの春日山鍊成会のことを知り、参加するようになった人。奈良や京都の寺社仏閣に関心があり、その流れでこの春日山鍊成会を知り、参加するようになった人。東京に居住し、奈良や京都に関心を持ち、旅をしている流れでこの春日山鍊成会を知り、参加するようになった人。神道に関心があり、その流れでこの春日山鍊成会のことを知り、参加するようになった人。春日大社で行われる巫女修行⁽¹⁴⁾に参加した流れでこの春日山鍊成会のことを知り、参加するようになっ

た人。春日大社の葉室宮司⁽¹⁵⁾の著書に感銘を受け、その教えを伺いに春日大社に通ったりしているうちに、春日山鍊成会のことを知り、参加するようになった人。春日大社に参詣した折に、春日山鍊成会の活動を知り、興味をもって参加した人。個人的に他の宗教的活動をしていることから、春日大社の聖地である春日山の登拝に関心を持ち、参加した人。山歩きが好きで、信仰にも関心があることから、二つを兼ね備えたものとしての春日山鍊成会に興味を持ち、参加した人、などであった。

次に、春日山鍊成会へなぜ参加し続けるのかについて、一部の方からお話を伺った。

山に登拝すると、とても幸せな気持ちになれるからという方。山に登拝すると、気持ちがさっぱりするという方。近所の神社やお寺への参詣と同じような感覚で、春日山鍊成会による登拝が自分の中で季節行事化してきたという方。神道のような伝統的な宗教に関心があるものの、他の神社は、昔から地域に住むなど古くからの信仰者ではない新しい人が、なかなか接点がもちにくいところがあるが、それにくらべて春日大社は信仰が開いていて、新しい者でも受け入れてもらえる感じがあり、春日山鍊成会もその一つの気がするから、という方。日常では神道などへの関心事を共有する友人や場所はないが、春日山鍊成会に参加すると、そのような関心事を共有できるからうれしいという方。巫女修行で知り合った友人と、春日山鍊成会で再会し、共に山に登拝することができるからうれしいという方。登拝のたびに棒杖の印が増えていくのがうれしくて、つい参加しているという方。春日大社の葉室宮司の著書に感銘を受けたことから、春日大社の行事には積極的に参加したいと思っていて、その流れで春日山鍊成会にも参加し、リピーターになったという方。その方は、葉室宮司の教えを広めたいと常々思っておられるようで、職場の友人などにも積極的に春日山鍊成会に参加を促しており、このときも友人を連れて参加していた。また、春日大社の信仰の心臓部に入ることができるから参加しているという方もいた。

その他、参加者の中には、本宮神社の付近で聖性の高い場所を感じたり、春日奥山五社のある山道で、涙がでてきたり深い感動を得るなどの、ある種の聖なる体験を得た人々もおり、そういった方の中には、そのような聖なる体験が、春日山鍊成会のリピーターになった要因だと語った方もいた。なお、春日山鍊成会で拝する神社のうち、本宮神社や春日奥山五社は、昔から人々に信仰されてきた聖なる場所である。

最後に、春日山鍊成会への参加が20回目の方による、その方にとっての春日山鍊成会の意義に関する語りを紹介する。この方はこの当時、仕事の都合で高知県に居住していたが、頻繁に春日山鍊成会に参加しつづけていた。

春日山鍊成会は、自分にとって、とても必要な活動である。仕事の都合で関西から高知に転勤が決まったとき、まず最初に春日山鍊成会に通えなくなることを心配したほど、自分にとって、春日山登拝は大切なものとなっていた。なぜかという、春日山に登拝する活動は、自分にとって聖なる活動であるからだと思う。自分は、聖なるものも俗なるものも、両方がないとバランスをとって生きていけない。仕事は俗なるものである。春日山鍊成会という聖なる活動を行っているからこそ、俗なる活動である仕事ができると感じている。どちらかだけでは、生きていけないと感じている。通常は仕事をして俗なる世界に身をおき、定期的に春日山鍊成会に参加して聖なる世界に行くというリズムが、自分にとっては心地よい。また春日山鍊成会は、自分の都合で参加が決められるので、都合の悪いときは休むことができ、無理なく続けられるのもいいと思う。

以上が、春日山鍊成会に参加する人々の気持ちである。春日山鍊成会は、様々な気持ちで参加する人々の、ゆるやかな集まりであり、同一の気持ちではないことが伺える。しかしながら、リピーターになっていく人々の傾向としては、春日山鍊成会に聖なる体験を求める傾向がみられるようである。

それはまずは、長く人々に信仰されつづけ、一般人が入ることが許されなかった場所であるという歴史的事実に保障された聖地春日山を歩くことにより、聖なるものが体験できるかもしれないという期待からはじまるのではないだろうか。そして、実際に歩いてみて、神道の形式を踏まえて聖地春日山を歩いている自分という記号を通じて、聖なるものを得ているような感覚を得て、満足する人々が現れていると推測される。また一方で、実際に参加者の身体を通じて、聖地春日山から身体的に聖なるものを感じとっている人々も、少なからずいるようである。⁽¹⁶⁾

おわりに

以上のことから、本稿をまとめる。世界遺産登録が春日大社へもたらした力は、主に二つあった。一つは、春日大社の内部の人たちが、世界遺産に登録されたのだから、何か新しいことをやろうという気運を共有したこと。二つは、世界遺産のうち文化遺産として春日山原始林が登録されたことから、春日大社の内部の人たちが、春日大社の春日山への信仰が、文化として世界的に認められたという認識を強くしたことである。

この世界遺産登録が春日大社にもたらした効果と、権禰宜のA氏の個人的な体験や志向が重なって、春日大社の信仰の歴史上は初めてとなる、一般人による春日山の登拝活動がスタートすることとなった。これが、春日山鍊成会の原型である。

登拝の会は、一度で終わることなく定期的に開催され続け、会の名称も春日山鍊成会という名称で定着していった。それと同時に、次第に世界遺産登録の記念行事としての位置づけは消えていった。

春日山鍊成会は平成21(2009)年で10周年を迎え⁽¹⁷⁾、活動はこの後も継続していく雰囲気をもつ。参加者はリピーター率が高く、20回以上の参加者も続々と生まれている。春日山鍊成会は、春日大社の新しい行事の一つとして、根付きつつある。⁽¹⁸⁾

春日山鍊成会の参加者の特徴としては、個人的な関心事から、個々人が個々人のペースで参加しつづける傾向にあることにある。そして、その信仰文化は個人に属するものであり、家族や地縁・血縁と共有しない。参加者は全国に点在する。

春日山鍊成会への参加者が、春日山鍊成会のリピーターになっていく理由は様々であるが、傾向としては、参加者の聖なるものを希求する気持ちを満たすものがあるようである。

現在の日本では、特定の宗教に属す感覚を持つ人々は稀であり、宗教的活動を実践する人々もそれほど多くはない。既存の宗教的世界にかかわりを持たない人々のうち、聖なるものを希求する人々は、自らそのような世界を見つけ、参加していくしかない。春日山鍊成会の活動は、そういった人々に受容されていったと考えられる。リピーターとしての参加が多い人々の中には、春日山鍊成会への参加が自分の生活リズムの一部になっている人々すら見られた。こういった人々のリズム

は、伝統的社会が促してきたハレとケのリズムを、春日山鍊成会を通じて自ら生み出しているようにも見受けられる。

世界遺産に登録されるということは、人類が国や宗教や民族の違いに関わらず、共通の宝としてその場所を認識するよう促されることを指す。聖地である春日山に登拝する活動は、春日山を聖地として尊重し、拝することを引き受けた人であれば、国籍や宗教や民族の違いに関わらず、だれでも登拝することができる活動である。その点において、春日山鍊成会の活動は、凶らずも世界遺産の理念と共通した考え方をもった活動であるといえるだろう。そして、この活動が、春日大社に今まで縁がなかった人々を取り込み、発足から現在まで続いてきたことは、現代の人々のニーズに沿った活動であるということがいえるだろう。

春日山鍊成会の活動は、古くからある神社である春日大社の中から、世界遺産登録をきっかけとして生まれてきた、新しい宗教文化ということがいえるだろう。そしてこの新しい宗教文化は、現代潮流に沿った文化であったことから、今まで春日大社と縁がなかった人々に受け入れられ、実践され続けられるようになったということがいえるだろう。

註

(1)——才津祐美子 (2003) 『『白川郷』における世界遺産登録の影響について』旅の文化研究所研究報告 12, 101-108 頁。柴崎茂光・庄子康・柘植隆宏・土屋俊幸・永田信 (2008) 『世界遺産管理における住民参加の可能性—鹿兒島県屋久島の島民以降調査から探る—』地域環境 13-1, 71-80 頁。

(2)——神田孝治・田代亜紀子・堀井久子・山村高淑・石井正巳 (2006) 『(パネルディスカッション) 世界遺産と観光』旅の文化研究所研究報告 15, 25-48 頁。

(3)——筆者が春日山登拝の会 (のちの鍊成会) に参加したのは、平成 11 (1999) 年 3 月 20 日の第一回の会と、平成 13 (2001) 年 2 月 18 日の本宮神社へはじめて登拝した会と、平成 19 (2007) 年 3 月 17 日・18 日の前日の参籠と春の峰の鍊成会と、平成 20 (2008) 年 1 月 9 日の本宮神社での大祓詞奏上の会の 4 回である。平成 19 (2007) 年の春の峰においては、後述する春日大社の権禰宜の A 氏に、鍊成会のことについて、いろいろとご教示いただきながら過去の会の資料等をいただくとともに、春日山鍊成会参加者に聞き取りなどをおこなった。その他の会は参加者の一人として参加した。本稿の内容の多くは、このときの情報を基にしたものである。

(4)——京都の寺社仏閣とともに奈良の寺社仏閣は、全国からの観光客や修学旅行生を受け入れてきた。春日大社は奈良有数のそういった類の寺社仏閣である。また近年では、平成 6 (1994) 年から平成 20 (2008) 年まで春

日大社の宮司であった葉室頼昭氏により、神道の教えを一般に紹介する多数の著書が出版され、それぞれに増刷を重ね、多くの人々に読まれている。たとえば、葉室頼昭 (1997) 『神道のこころ』春秋社、葉室頼昭 (1999) 『神道と日本人』春秋社、など。

(5)——平安末期から近世まで、春日は、現在の春日大社に継承される神社と、現在の興福寺に継承される寺院との神仏習合であった。春日山は、春日にとって長く信仰の対象であったが、そこで儀礼を行う人々は、神道系の人々ともに仏教系の人々の双方が存在した。春日山には、神道系の拝所とともに、仏教系の儀式の場の跡が点在している。本稿では、これら双方の人々を総称して、宗教的職業の者とする事とした。

(6)——なお、現在では、春日山のうちの御蓋山は、春日大社の管理下にあり、御蓋山以外の春日山は国立公園として奈良公園の管理事務所の管理下にある。これは、明治の神仏分離令に伴い、興福寺が一時廃寺となった際に、興福寺の影響力の強かった御蓋山以外の春日山を含む、興福寺の影響下の場所が荒廃したことから、奈良の人々がそれらの場所に国立公園の認定を受けることにより、それらの場所を守ろうとした歴史によるものである。

(7)——理由としては、出羽三山神社は神社式での登拝活動を行っていることから、他の山における修験道式の登拝活動などよりも、春日大社の神社としてのスタイル

となじみやすいと判断したそうである。

(8)——藤原氏により古くから中臣祓という祝詞が神へ唱えられてきた。これは現在、大祓詞という名称で多くの神社で唱えられている祝詞とほぼ同じである。

(9)——通常、この入り口は閉ざされており、これより奥へ進むことはできない。

(10)——座の数え方は、43人が一斉に一度の大祓詞を奏上すると、43座の大祓詞の奏上を行ったとみなすということであった。当日は全員で一千座の大祓詞を奏上したこととなった。

(11)——A氏にいただいた資料は、平成16(2004)年春の峰から平成19(2007)年春の峰までの参加者名簿(ただし、平成16(2004)年冬の峰と平成18(2006)年春の峰の資料はなかった)と、平成20(2008)年秋の峰の参加者名簿である。

(12)——登拝の回数が増えれば上がるほどよいという思想は、修験道によく見られる思想である。A氏は、春日山の登拝の活動に、修験道の要素も取りこんだといえるだろう。

(13)——図5では、参加者の多い都府県は、都府県名に基づき、数えた。一方、参加者が1～2名の県では、その参加者が県を代表するわけではないことから、その参加者の市名に基づき数えた。

(14)——巫女修行とは、一般の人々で巫女に関心のある人を募集し、2泊3日の巫女修行の体験を春日大社内で行う活動のことである。奈良県の観光協会なども連携

し、観光客が手にする奈良のガイドブックなどに情報を載せている。現在では、春日大社公式ホームページにも情報を載せている。年に7～8回行われる。参加者は、朝拝、夕拝などの祭礼を学び、行儀作法を指導されることとなる。1回につき、5人から10人程度で行われる。

(15)——この当時、葉室氏は宮司であったことから、この時点でのこの方の語りを再現するために、ここでは葉室宮司と記すこととする。

(16)——エリアーデは、「人間が聖なるものを知るのは、それがみずから顕れるからであり、しかも俗なるものとは全く違った何かであるとわかるからである」と指摘する。(ミルチャ・エリアーデ 風間敏夫訳(1969)『聖と俗 宗教的なるものの本質について』法政大学出版社)。本稿で用いた、参加者が体験した身体的な聖なるものとは、俗なるものとは異なる体験を指すこととし、その中には、聖地を歩くとき深い感動が襲ってくるというような体験とともに、幸せな気持ちになる、すっきりするなどの体験も含めることとしたい。

(17)——社報『春日』82号(2009年8月発行)では、春日山鍊成会10周年を記念する記事が2頁にわたって掲載された。

(18)——現在では、春日大社公式ホームページに春日山鍊成会への参加案内が掲載されている。初期の頃は社報のみでの募集であったことと比較すると、現在はよりオープンな募集へと変化している。

(明治学院大学教養教育センター、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2009年5月28日受付、2009年9月25日審査終了)

New Religious Culture Born by Registration as World Heritage : From the Activity of Kasugayama Renseikai in Kasuga Taisha Shrine

KAWAI Yasuyo

This article explains the process of the birth and the establishment of a new religious culture born from the inside of Kasuga Taisha Shrine, one of Japan's most famous and well-established Shinto shrines, after its registration as a World Heritage site.

Mt. Kasugayama had continued to be a sacred place historically important for the cult of Kasuga for many years and ordinary people were forbidden to climb it. After it became a World Heritage site, Kasuga Taisha Shrine started the Mt. Kasugayama climbing activity guided by Shinto priests for ordinary people. This is the origin of Kasugayama Renseikai. This activity marked its 10th anniversary in 2009.

The climbing route and manner were organized by the current Shinto priests of Kasuga Taisha Shrine based on the historical facts.

The participants of Kasugayama Renseikai do not belong to any social groups united by blood or territorial ties with people who have had a deep connection with the cult of Kasuga. Many of them have not had a connection with Kasuga Taisha Shrine. Most of them participate in the activity individually based on their personal interest.

For the situation of the current Kasugayama Renseikai, many people participate in the activity repeatedly, and some of them have participated in the activity 28 times. One of the presumable reasons is that Kasugayama Renseikai satisfies the feelings of participants who aspire to the spiritual.

The sacred Mt. Kasugayama climbing activity organized by Kasugayama Renseikai has something in common with the philosophy of World Heritage. This activity will continue into the future while being accepted by people who have not had a connection with Kasuga Taisha Shrine but aspire to the spiritual.

Key words: World Heritage, Kasuga Taisha Shrine, new religious culture, Kasugayama Renseikai, sacred place